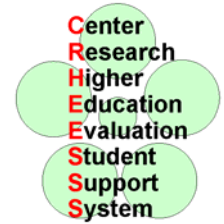


週刊センターニュース No.91



第91号(2006年1月6日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第102回 日時: 1月12日(木) 14:40~16:10

場所: 金沢大学角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者: 橋本 勝(岡山大学教育開発センター)

テーマ: 「学生が授業を企画する 岡山大学の取り組み」

概要: 岡山大学は、「新機軸『学生参画』による教育改善システム」により文部科学省の平成17年度特色GPに採択された。その責任者である橋本教授に「学生主体のアプローチに特色があり、組織性においてもシステム化への発展が認められ」と評価された取り組みについて紹介していただく。本学の教育改善においても有益な示唆が得られるものと確信する。

本年も大学教育開発・支援センターをよろしくお願ひします。

キャンパス移転後初めてという大雪で新年を迎えました。1月4日の学長年頭挨拶では総合移転を終えて新たな決意で教育・研究・診療に臨む年にしたいとの、お言葉がありました。当センターは学内共同教育研究施設として今年も、本学の教育充実のために全力を尽くす所存でありますので、なにとぞ皆様方のご協力をよろしくお願ひいたします。

昨年、センターでは3月に第2回大学教育セミナー「学士課程教育の再構築について考える」とコンファレンス「専門職大学院の将来と認証評価 法科大学院を手がかりに」(主催: 金沢大学、後援: 日弁連法務研究財団)、9月に第8回教養教育全学研究会「新しい時代の初年次教育 - 導入教育、補充教育を考える -」(共通教育機構と共催)、そして12月に第2回専門分野別教育開発セミナー「文系基礎とコア・カリキュラム」を学内外の講師をお招きして開催しました。いずれも、専門職大学院開設、共通教育カリキュラム改革、そして三学域化という本学にとって極めて重要な課題への対応のため、全学FDとして企画・実施したものでした。また、教職員・学生の方々のご協力を得て開催してきました角間ランチョンセミナーと共同学習会は、それぞれ通算240回、100回を超え、日常的なFDが実現しつつあります。さらに、医学部保健学科FDで当センター西山教員が報告するなど、各部局のFDへの協力の機会も与えていただき、センターとしては本学の教育改善にいささかなりとも貢献できたのではないかと考えております。

今年は、上記のようなFDの諸活動に加え、特色GPに採択されましたIT教育推進プログラムへの新たな取組を始めます。総合メディア基盤センターを中心とした教材作成を踏まえ、当センター堀井教員の「高等教育におけるポータルサイトの機能」にかかる研究成果等に基づき、ノートパソコン必携を前提としたIT教育推進を試みます。

全国的な高等教育研究への貢献としては、昨年2月に企画本『国立大学法人化の衝撃と私大の挑戦』(エイデル研究所、全367頁)を刊行しました。今年は、昨年11月に文部科学省から受託した先導的の大学改革推進委託研究「教員の所属組織」を、早田副センター長を中心に、学内外の研究者の協力を得て継続して実施してまいります(センターニュース第90号参照)。また、1月25日(土)26日(日)には、大学教育学会課題研究集会の本学における開催が決まっております。

組織的には、昨年7月に教育研究評議会でお認めいただいた六つのプロジェクトを中心にして、センターの三部門(大学教育研究開発、評価システム研究、教育支援システム研究)が活動できるよう体制を整えていきます。従来、本学の教育改善に資すると思われる学会、研究会には4名の専任教

員が参加し、そこで得られた情報はセンターニュースにおける活字報告のほか、共同学習会で口頭報告し、知識の共有化を図ってきましたが、こうした活動にもプロジェクトメンバーの方々のご協力をお願いする予定です。なお、本年3月、評価システム研究部門に、教員（名古屋大学大学院で高等教育について研究、現在は広島大学高等教育研究開発センター研究COE研究員）の新規採用が内定しており、ようやく定員5名充足の状態を新年度を迎えることとなります。

今年も、当センターの活動に対しさまざまなご意見を頂戴したいと考えております。センター専任教員一体となって、期待に応えるべく、研究と諸活動に励みますので、よろしく申し上げます。

（センター長 青野 透）

導入科目「初学者ゼミ」について考える

～保健学専攻FD研修会および文法経3学部合同FD研究集会より～

今春より、教養カリキュラム刷新に伴い導入科目「初学者ゼミ」が開講される。今後は、全学部での必須化を見据えた「初学者ゼミ」についての議論が行われると思われる。12月21日医学系研究科保健学専攻でFD研修会が、12月22日には文学部、法学部、経済学部合同のFD研究集会が開催された。ともに、「初学者ゼミ」がテーマとして取り上げられた。その概要を紹介し、そこでの議論を通して明確になってきた今後の検討すべき点をまとめておきたい。

保健学科では今春からの必須化は見送られたが、今後議論を深めるとのことであった。2つの報告があった。まず筆者が他大学における初年次少人数ゼミナールの開講状況、授業内容について紹介した。国立大学の半数以上で全学共通科目として開講されていること、また京都大学の初年次少人数ゼミナール「ポケットゼミ」のシラバスを基に授業形態を分類した結果を述べた。もう一つの報告では、文学部の古畑先生が今春の教養カリキュラム刷新に至る検討の経緯、「初学者ゼミ」の趣旨を説明された。さらに、少人数ゼミナールの具体例として、東京女子医科大学で行われているチュートリアルについて紹介された。2つの報告の後、自由討議が行われたが、主な論点はゼミナールとは何かであった。筆者の報告でも紹介したが、多くの大学で行われている初年次の少人数ゼミナールでは、各教員が考えるゼミナールの到達目標と必要とする授業形態に大きなばらつきがある。例えば京都大学の「ポケットゼミ」では、双方向の議論を重視するという基本方針はあるものの、講義中心のもの、最小限の知識を与えた上で輪読、実験、実習を行わせるもの、さらに発展的なものとして基本学習を行ったうえで学生自身にテーマを設定させるものなど、その授業形態は各教員の裁量に委ねられている。主体的な学習を促すために学生自身にテーマを設定させるところまで到達したいが、それに必要なミニマムエッセンスをどう設定して、初年次の学生にごく限られた時間でいかに伝えるか、題材、分野によっては大きな困難が予想される。チュートリアルとは、ある問題に基づき、学生たちが自分たちで議論しながら、学習の内容・方法・方向を決めて問題を解決していくグループ学習をいい、教師は知識を与えない助言者として参加する。筆者の個人的な経験からは、理系の研究室でのゼミといえば実験データの検討会や論文の輪読会などを頭に浮かべるが、より豊富な経験や知識をもつ教員や先輩が指導するという形態が主となる。文系、理系など分野固有の題材のよさをいかす最適な授業形態を模索する必要があるのかもしれない。自由討議では、平成20年度からの3学域それぞれでゼミの標準的な授業形態を設定する必要があるのではないかという意見に収束したように思えた。

文学部、法学部、経済学部の合同研究集会では、井上先生（法学部）、竹島先生（経済学部）、古畑先生（文学部）が、現行の教養カリでの少人数ゼミナール、経済学部の専門科目として開講されている基礎演習での経験や取り組みを紹介された。学生主体の議論やディベートといったゼミの実施形態が紹介されたが、保健学専攻でのFD研修会とは対照的に、実施形態についての議論は起こらなかった。文系ではゼミナールの標準的な実施形態はすでに存在していると思われる。討論での主な論点は、教員と学生、学生と学生との双方向、多方向の議論を保障する環境についてであった。互いの信頼関係を早期に築くことがきわめて重要であると指摘された。成績評価についても議論された。この点については保健学専攻の研修会でも論点となった。井上先生は、学生による自己評価を取り入れた成績評価の取り組みを紹介され、学生にとっては自己発展につながると述べられた。

今後、「初学者ゼミ」の全学必須化に向けて、さらなる議論と全学での情報の共有が必要と思われる。（大学教育研究開発部門 西山宣昭）